

「ふぐも」と「おもちゃ」と「創造力」(1)

〈お茶の水女子大学附属いずみナーサリー講演会より〉

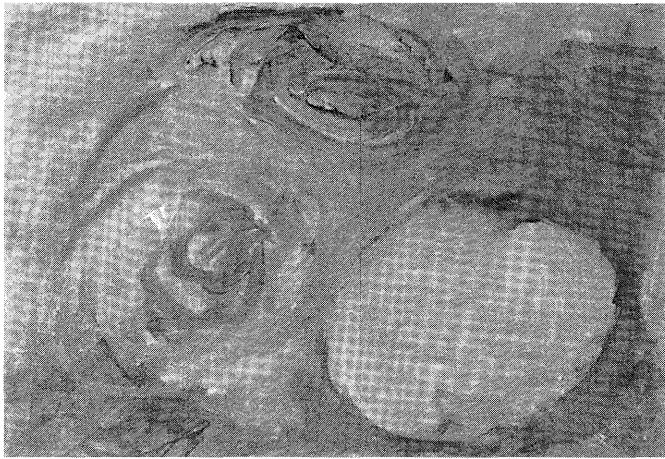
和久洋三

はじめに

僕は、東京の糞谷に、平成元年に、童具館という小さな建物を建てて、そこで子どもたちとかわる場所をつくりました。零歳から小学校六年生までの子どもたち百五十人ぐらいが通ってきています。また、子どもたちと絵を描いてくださいとか、積み木遊びをしてくださいと、いろいろな幼稚園や保育園に呼ばれ、全国を回って、子どもたちとかかわってまいります。

子どもに秘められた力

最初に、これを見ると一目瞭然なのでお見せしますけれども、絵1は三歳児の子どもが描いた甘食パンとメロンパンの絵です(P9)。すごいでしょう、色遣い、タッチ。あつという間に二十分ぐらいで描いた絵です。絵2は四歳児のニワトリ(P11)。そして、絵3は四歳児の、初めて絵らしい絵を、描きたいと言って描いた、ミミズクの剥製です(P12)。こういう作品が次から次に、出



▲絵1 メロンパンと甘食パン・3歳児

てきます。

実は、これらには一つ、秘密があります。絵の具がアクリル絵の具なのです。速乾性があります。今の普通の幼児用の水彩絵の具を与えていたのでは、こういう絵はできません。乾くのと、混ぜていくときの都合いが、ちょうどよい量の濁色をつくって、色彩に幅を与えてるのです。僕が度肝を抜かれるような作品ができたのは、この絵の具を与えてからです。幼児教育は、こういう一つの素材によって全く違う世界が開けてくるということを、その時に感じました。

僕は上野の芸大の大学院を出ていますから、絵はヘタではありません。でも、くやしければ、子どもたちにはかなわない。しかし、そういう力を子どもが秘めているということを知ったことは、感動的なことでした。僕の指導があるからで

きたと最初は思っていたのですが、僕がいなくてもやるのです。これがまたうれしかった。

積み木遊びでも、子どもは、すごい量ですごい表現をします。一人が十箱ぐらい平気で使います。だから、十人もいたら百箱ぐらい使うわけです。このことにもやっぱりびっくりしましたね。

量を与えることによって全然質の違う世界が生まれることを知りました。

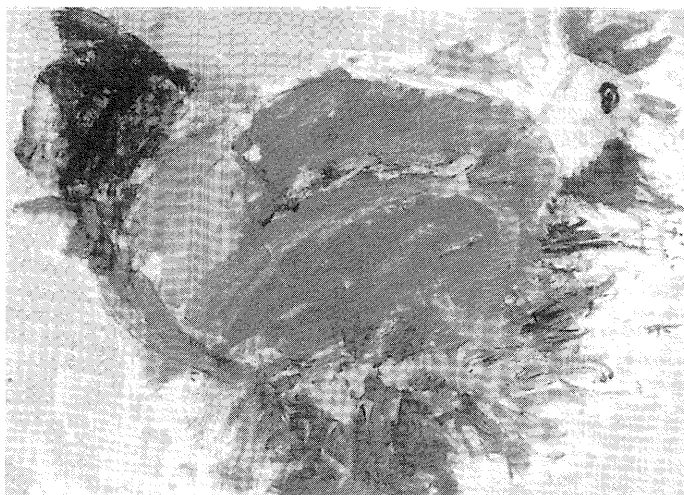
「創造力」「想像力」「記憶力」

さて、絵を描くことも、積み木による表現活動も子どもにとっては遊びです。遊びというのは創造活動です。創造力の世界に、僕は若いころからこだわって、子どもたちの創造性を開花するとういうことをテーマにしていました。なぜ創造力が大事なのかということとはあまりよくわかっていな

かったけれども、自分が物をつくっていて、何か新しい世界を生み出すということは、すごく充実した楽しい世界でした。それで、子どもたちにいっぱいやらせたいという願いがあつて、おもちゃをつくり、やがて、子どもとかかわる中で造形活動に発展していったのです。

この「創造力」を開発するために必要なのが、「想像力」。「想像力」を豊かにするために必要なのが、情報です。その情報をインプットする（覚えること）、それから思い出すという作業、アウトプット、これをするのが「記憶力」です。情報を使っていろいろ考えて、どうしようか、ああしようか、よし、じゃあ、こうしてみようかと思つて実行するのが創造活動です。

「創造力」「想像力」「記憶力」は三大思考力といわれているものです。



▲絵2 にわとり・4歳児

何かをするためには、いろいろな情報を駆使して想像するという作業が前提としてありますが、しかし、この「想像力」の世界は客観的な評価ができません。「記憶力」の世界は、情報を正しく理解しているかどうかの○×がつけられるので、教育はここが中心になって、肥大化していくわけです。そのため、「想像力」を前提にした「創造力」の世界がどんどん教育の中から欠落していく。情報を頭に詰め込むことばかりが行われる、これが、教育の大きな問題点だと思っています。最近では、失敗することを怖れて、結局手を出さない子が多くなります。これでは能力開発ができません。人に言われたことを言われた範囲でやっていくことが一番安全だと思うから、そういう生き方を選んでしまう。残念です。

しかし二歳児は、その点では、「僕がやる」「私

がやる」です。二歳になって言語を獲得すると、「自分で！」と言います。それから「これ何？」と言い出しますね。「これ何？ これ何？」と、うるさいほど聞いてきます。すごい知的好奇心です。知りたくてしよがない。

活動衝動

その「これ何？」が四歳になると、「何で？」になります。「何で？」「どうして？」、急激な成長だと思います。ただ即物的に一つひとつのものを「これ何？」と言っていた人間が、物事には因果関係があるといふことが、たった一年数か月でわかってくる。これに応えられる環境をどうやってつくっていくか



みみずくの剥製・4歳児

ということが、僕はとても大事だと思っています。つまり、人間って、本当は勉強が大好きなんです。知りたくて知りたくて、しよがない生命なのです。

知ることは「自由」につながっていきます。自由になるということは、やりたいことがやれるようになることです。「これ何?」「何で?」「どうして?」という知的好奇心は自由を獲得するために必要なのです。だから、子どもは何でもやってみて、自分で身につけようとします。いたずらに見えてもあまり制限してほしくない。

フリードリッヒ・フレーベルは、人間の精神の一番奥に活動衝動があると言っています。動かすにはいられない衝動です。動いて働きかけることによって、必ず何か新しい事態が生まれ、発見があるからです。その生命衝動によって、何かとかわり、どんどんいろいろなことを吸収していく、学びとっていく。それによって人間はどんどん自由になっていくということではないかと思えます。

一致すること

二歳になると、「同じ」ということにすごく関心を示します。一致することの快感を求めている活動です。一致の快感。普通なら二人なら二人、三なら三なるものが同じ考えになる、一致することとは、可能性は、少なくなるように思えます。でも生命世界というのは、一致することによって豊かになっていくようです。たとえば、みんなが一致してこれをやろうというときはどんどん豊かになっていくけれども、それがばらばらだったら何も豊かな世界は生まれません。何よりも、生命というのは、おしべとめしべ、雄と雌が一致することによって命がはぐくまれていきます。つまり、一致することによって生命は豊かになっていく。

実は僕の積み木は、何を持ってきても一緒に遊べるように大きさに秩序をもたせていて、それによつて同じ高さや長さになり、どんな造形的な世界が広がっていくのです。

自発性

二歳児が「自分で」というのは自発性の現れです。これがすべてのもとはです。自発性があるから自主性が出てくる。自主性が出てくるから主体性ができる。主体性ができるから自立するのです。「自発性」というのは、「自分で」ですね。自主性というものは、自分で考えて最後までやるといふことです。

今、日本では、自主性から先があまり成長しないのです。自分がやりたいまではあるけれども、最後まで考えて、自分でやり抜いていくという方

が育てられていない。

「自分で」と言ったときに自分でやらせることを大切にするためには、待たなければだめです。指導しようとしなくて、子どもが自分の答えを見つけて出すのを待つ。これをしないと、子どもの自発性は絶対に育ちません。

実は僕は、こういう作品を子どもがつくるようになって、指導はできないと思うようになりまして。僕よりいいものをつくっている人間に、指導はできない。それなら、どうすればいいのか。子どもが夢中になって取り組める環境を設定してあげることしかありません。何かを教えようとしなくて、子どもが無我夢中になって、自分が答えを探しだせる環境を用意してあげる、それが我々の仕事ではないかと思っています。だから、今は、僕はアトリエに指導に入っても、ああしろ、こうし

ろとは一切言いません。

最近では、日本中のいろいろな幼稚園や保育園に呼ばれますが、そこで、全く初めての子と出会います。

そこで何をするかというと、「こういう絵の具をそろえておいてください」「こういうモチーフをそろえておいてください」と伝えておくだけです。最初の導入で、子どもの気持ちモチーフに引きつけることはしますが、子どもが制作を始めたら、一切何も言いません。放っておきます。ちよつと緊張感が弛緩した子、集中力が途切れたような子に、「おお、いいじゃないか、すごい！」と言うだけです。そうすると子どもはその気になって、またやり始めます。

これができるようになったのは、必ず子どもはやるということを信じられるようになったからで

す。

積み木遊びでも、導入が終わると放っておいて、好きにやらせて集中し出すと、それを見ているだけです。そこから生まれてくるものがすごい世界なのです。

やがて子どもは、「できた」という快感を得ます。つまり、納得する答え自分で探すのです。それが「答えがあるんだ」「見つけれらるんだ」と思う体験になり、やがて答えが見つかるまでやめないようになります。

では、どんな積み木を子どもに与えるかというと、答えが見つけれられる活動ができるようなものです。それはどんな積み木なのか…。

〈続く〉 八月号掲載予定

(童具館)

(講演) 平成十八年十二月九日